

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520737

研究課題名（和文）

古代東地中海沿岸域の政治文化：集会・議論と権力の表象 ギリシアとエジプト

研究課題名（英文）

Political culture in the Ancient Eastern Mediterranean Area -Greece and Egypt-

研究代表者

高橋 秀樹 (TAKAHASHI HIDEKI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：80236306

研究成果の概要（和文）：本研究は、古代世界における政治文化について、古代ギリシアと古代エジプトの事例をそれぞれ分析しつつ、比較しながら、それぞれの独自性と共通性を明らかにしようとするものである。具体的には、古代ギリシアの叙事詩と古代エジプトの教訓文学を比較し、弁論術（話術）がエリート層の政治的教養とされている点は共通しているが、過去の出来事をどのように利用して演説を行うかという点で異なっていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：I compared ancient Greek and ancient Egyptian political culture to clarify similarity and difference between these cultures. They shared the same phenomenon that elites had to have skills of traditional rhetoric. But they showed difference in methods of using memories of past events.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：西洋史

科研費の分科・細目：

キーワード：古代史、文化交流史、比較歴史学、西洋古典学

1. 研究開始当初の背景

古代ギリシアの文明は、ヨーロッパにおける諸文明の源として位置付けられ、東方の諸文明と一線を画すものとして考えられることが多い。しかし、実際にはいわゆる古代オリエントの諸文明から大きな影響を受けて初めて成立可能だったことが、（とりわけエーゲ文明の研究が進んで以降）明らかになっている。しかしそのような研究は、多くの場合、物質面に注目することが多く、文化面や政治面では、古代ギリシア文明を、先行する諸文明と峻別する傾向がなおも顕著である。

とりわけ民主政を生み出した点で、専制的な君主政が発達した先行諸文明とは決定的に区別されることが多い。このような状況に対する批判として、世界史全体の脈絡から見れば、サイドのオリエンタリズム論などが注目される近年の動向である。そして、古代ギリシア史に即した研究としては、ブルケルトによるギリシアにおけるオリエンタリズム化革命の研究や、ウェストの『ヘリコンの東の顔』、更にバナルの『ブラック・アテナ』などの研究が注目される。しかしこれらの研究も、古代ギリシアと先行東方文明との交流史に

力点を置きがちである。そこから更に踏み込んで、どこまでが従来見過ごされてきた東方との共通点であり、どこからがそれぞれの独自性を示す事象といえるのか、という類比論・対比論の双方を意識した相互の特性の史的描写は十分とは言えない。

2. 研究の目的

本研究は、上記1のような一般的理解の妥当性や問題点を精密に問おうとするものである。申請者は既にこのような問題意識から基本的な準備作業を行く(特に、高橋秀樹『神話から見た古代東地中海沿岸の文化交流』高志書院 2005) 其後の成果を継続的に公表してきた。これまでは宇宙観や人間観など思想史的観点からの作業が多かったが、今回の申請では特に政治文化に力点を置いた。民主政が成立したギリシアにおいて、その文化(とりわけ政治文化)は、どこまで先行諸文明と共通し、どこから分岐するのか。単に制度的な枠組の違いにのみ目を向けるのではなく、その枠組の中で行動した人々の具体的な政治的行動様式に注目する。これにより、古代ギリシアにおいて発生した民主政のオリジナリティの、真に核心的な部分の所在を探る。

3. 研究の方法

古代ギリシアの民主政の重要な特徴の一つは、政治的意思決定の最終決定権が、市民総会たる民会にあることであるとされる。公開の場での議論の文化が、その根底にあることになるが、かかる文化は、民主政が成立する以前から(つまり、いわゆる貴族政の時代から)ギリシアに存在していた。つまり、公開の場での議論の文化は民主政の産物ではなく、民主政が公開の場での議論の文化の産物であることになる。では、民主政を生み出さなかった文明においては、かかる文化の発達は見られたであろうか。強大な君主政が発達した古代エジプトに目を向けると、ここでも公開の場での議論の文化が発達していたことが、様々な教訓文学からうかがい知ることができる。では、古代ギリシアにおける民主政成立以前の当該文化と、古代エジプトにおける当該文化を比較し、その共通点と相違点を明らかにすれば、民主政成立の文化史的メカニズムを解明する手がかりをえることができると思われる。

4. 研究成果

本研究の成果は、下記の5の諸論文で公開されているが、研究進行の順序と発表の順序は必ずしも一致していない(学術雑誌の発行時期等の都合のため)。以下では、研究進行の順序に即して成果を述べていくこととする。

る。

古代ギリシアにおける伝ホメロス作英雄叙事詩と、古代エジプトにおける教訓文学を比較した結果、どちらの文化においても、エリートが身につけているべき政治的スキルとして、公の場での話術が重要なものとして認識されている。しかも、議論を聴いている人々の集団としての第三者が、どちらにおいても重要な影響力を有する主体として認識されている。また、実際に議論を行う際に、論的や聴衆を説得するために、過去の出来事に言及しながら主張を進めることも、どちらの文化でも重視されていることが明らかになった。しかし、引用される過去について、エジプトでは歴史的、伝説的ないし神話的過去でも有効であるのに対し、ギリシアでは話者が直接体験した過去の出来事でなければ、有効に機能しない傾向が強いことが見て取れる。このような歴史的事実を示したのが下記の雑誌論文である。

このことの現実の政治運営上の意義として、つまり過去の出来事(特に政治的出来事)の記憶の固定化は、その後の政治的意思決定や政治的主体の行動様式に大きな影響を与えることになる。その端的な例として、過去の政変についての記憶を逆手にとって非合法的政権を成立させてしまう事態に至った事例がギリシアに認められる。このような観点からペイシストラトスの第2次政権獲得におけるピュエのエピソードの構造を分析した成果が、下記の雑誌論文である。

政治的行為はしばしば密接に軍事的・戦闘的行為と関連する。ピュエのエピソードは戦闘神的な属性を有するアテナ女神についての信仰が現実政治に利用されたものだったが、古代地中海世界においては特定の女神の中に戦闘神的属性と豊穡神的属性が併存しつつ拮抗する場合がある。これについて、エジプトやシリア、ギリシアの諸事例を俯瞰しながら比較した研究が、下記の雑誌論文及びである。

再び「話術」ないし「弁論術」の問題に戻り、『イリアス』第2書を主たる対象として分析を進めたのが、下記の雑誌論文である。当該史料に見られる「夢のお告げ」という要素を通して考えたとき、強制(強請)を行う発言におけるギリシアの特性はより鮮明になる。発言の強制力を増すために言い添えられる発言者自身の過去の出来事は、発言者以外の共有体験者の存在を要するものであり、ギリシアの「懐疑的」精神をより鮮明にする事象である。しかしこれが、指導者をも他の者たちと同様に厳しい検査の目にさらされる社会を意味するののかと言えば、そうとは断言できない。強制(強請)する発言のルールに則っていないのに、意思を貫徹していくアガメムノンと、則っているのに非難されるテ

ルシテスの例は、弁論術というものが実際の「社会」(範型として尊重される叙事詩の中の「社会」)ではたしてどこまで有効なのか、という問題をつきつけている。弁論術の技法が高度に発達していながら、実際にはそれが通用しない状況がある。弁論術の発達は、民主政が高度に発達することになるギリシアにおいても、それをどこまで下支えしているものであるのかという深部まで分析されるべき現象なのである。

政治的ないし社会的地位と弁論の関係について更に事例研究を進めたのが下記の雑誌論文である。立場の違いは、発言内容の組み立てに影響を及ぼす。対等な立場や、下位から上位への(例えば人間から神への)発言では、精密に必要とされる構造が、神から人間への指示の場合には、およそ必要とされない。このことは逆の意味をも示す。つまり神から人間への指示が絶対的なものであることは、あまりにも当然のことであるが、逆に言えば、それが絶対的であるのと同じほどまでに、同等の立場で行われる強制(強請)行為を含む発言における過去の出来事への言及は、極めて重要な要素として扱われている可能性があると言える。また同時に、この法則的傾向が逆用され、上位から下位への強制(強請)発言であるにもかかわらず、過去の出来事への言及を行う事例などは、その発言を行う人物の特徴的な性格の描写に当該の法則的傾向が利用されていることが見て取られる。

上記のような法則性ないし傾向を、いくつかの具体的な事例で検証しつつ、新たな側面を掘り起こす作業を進めたのが下記の雑誌論文である。『イリアス』第4書におけるゼウス神とヘラ女神のやりとりは、共有する過去の出来事への言及を伴って行われる強制(強請)行為は拒みうるものではないので、その結果、不均等な交渉さえも承諾されざるを得なくなる事例を示している。またアテナ女神の行動の描写は、沈黙によって不均等な交渉に巻き込まれることを回避し、自ら欲することを要請された時には、共有する過去の出来事への言及がなくとも行動に移る事例を示している。これを要請する側から見れば、相手が欲している行動を強制(強請)する場合には、共有される過去の出来事を敢えて言及せずに発言しても支障ないということになる。ある意味でそれとは逆の事態として、過去の出来事への言及がないまま強制(強請)行為を行った際に(つまり、ルール上はそれに従う必要は無かったのに)その強制(強請)に従う事例は、どのように認識されるかということ、愚行の典型として扱われてしまうことも史料から見て取ることができる。過去の出来事への言及がない強制(強請)発言に従ってしまうパンダロスの行為は、自ら

守っている城市の破滅を進行させてしまう結果となる。アガメムノンがギリシア人軍勢を叱咤激励する場面は、強制(強請)行為に伴う過去の出来事への言及が求める行為と内容的にも対応する整った事例や、過去の出来事について丁寧に述べ立てても、共有される過去の出来事への言及ではない場合には、直接の応答を引き出すことができなかつたり、論点がずれてしまつたりする事例を示している。このように、強制(強請)発言における過去の出来事への言及とその発言がもたらす結果との対応関係をつぶさに見ていくと、非常に繊細な行動様式の実態があぶり出されてくる。

上記で示してきた法則的傾向は、非常に多くのヴァリエーションに即して展開されており、その戦略的手法は極めて多様である。今回の研究課題では、その一角を明らかにしたに過ぎない。一層多くの具体的事例を集め、それらを総合していくことが、ギリシアとエジプトの政治文化の解明に繋がるはずであり、今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

「誓約を破棄する者と非難をいなす者～『イリアス』第4書に見る強制(強請)行為～」, 高橋秀樹, 査読有, 『資料学研究』, Vol.9, pp.51 - 70(2012)

「メネラオスとパリスの一騎打をめぐる～『イリアス』第3書に見る強制(強請)行為～」, 高橋秀樹, 査読有, 『新潟史学』, Vol.66, pp.22 - 37(2011)

「話術」と過去 古代エジプトと古代ギリシアの政治文化」, 高橋秀樹, 査読有, 『ヨーロッパ文化史研究』, Vol.12, pp.33 - 75(2011)

「アガメムノンの夢」, 高橋秀樹, 査読有, 『資料学研究』, Vol.8, pp.56 - 72(2011)

「アフロディテ女神をめぐる宗教史の一断面 Ilias 5.311-431.からの展望」, 高橋秀樹, 査読有, 『西洋史研究』, Vol.39, pp.77 - 94(2010)

「豊饒の女神をめぐる神々 ギリシア、エジプト、メソポタミア」, 高橋秀樹, 査読有, 『ヨーロッパ文化史研究』, Vol.3, pp.341 - 355(2010)

「ペイシストラトス第二次政権獲得時におけるピュエのエピソード 歴史的記憶の政治的機能とその破綻」, 高橋秀樹, 査読有, 『資料学研究』, Vol.7, pp.15 - 33(2010)

〔学会発表〕(計 3 件)

「豊饒の女神をめぐる神々 ギリシア、エジプト、メソポタミア」, 高橋秀樹, 東北学院大学オープンリサーチ『光は東方より』, 東北学院大学, 東北学院大学(2009.12.12)

「Ilias 5.330-430. アフロディテ女神をめぐる宗教史の一断面」, 高橋秀樹, 2009年度西洋史研究会大会, 西洋史研究会, 立教大学池袋キャンパス(2009.11.14)

「アルカイック期アテナイの党争と神話」, 高橋秀樹, 日本西洋史学会第59回大会, 日本西洋史学会, 専修大学(2009.6.14)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 秀樹(TAKAHASHI HIDEKI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：80236306

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：